

言葉の歩みをたどる

第20回国際歴史言語学会から

「日本語系統論が海外で活発に研究されている現状を紹介したい」

大阪府吹田市の国立民族学博物館(民博)で開かれた第20回国際歴史言語学会の会長を務めた菊澤律子・民博准教授は、

一般公開シンポジウム「アジア・太平洋地域諸言語の歴史研究の方法」

「日本語の起源は解明できるのか」(7月30日、民博主催、毎日新聞社後援)で、企画意図をこう述べた。議論した9人は全員、海外の研究者だった。

歴史言語学では同系とみられる言語の同源語(語源が同じ語)を比べて規則的な対応を見いだし、共通の祖語の形を復元する。日本語の起源に

①

ついてもこの「比較方法」で諸説が出されたが、いずれも証明が不十分で、日本語はどの系統にも属さない孤立言語とするのが定説になっている。

米ハワイ大のライル・キャンベル教授によると、世界には約4200の語族があり、その3分の1にあたる143言語が1言語1語族の孤立言語

だ。祖語が同じでも、分岐してから何千年もたてば、祖語から受け継いだ共通の要素が形を変えてしまう。

さらにやっかいなことには、共通の特徴が見つかったとしても、祖語から受け継がれたものなのか、片方からもう一方への借用(外来語など)な

鍵となる諸語に絶滅の危機

■日本語と琉球諸語

のかを見極めるのが難しい。

パリ社会科学高等学院で博士号を取得し、日本

学術振興会外国人特別研究員として京都大で研究するトマ・ペラールさんが、このような困難を抱える日本語系統論に新しい視点を与えるものとして重要性を強調したの

えに立つ。

琉球諸語には少なくとも

「ジャポニック語族」に含まれる。琉球諸語がいかに日本語と違っているか、ペラールさんは離島の高齢の話者から聞き取りした自

ロップパのスラブ諸語やロマンス諸語の各言語間と同じかそれ以上の違いがあるという。

また、琉球諸語は日本語で失われた古い特徴を

残している。日本語では「エ/ウエ/イエ」「オ/ウオ」「イ/ウィ」の区別が10〜11世紀に失われたが、琉球諸語ではほ

聞き取り・研究が急務

が、九州の南から台湾の北まで約800キロにわたって散らばる琉球列島の言語だ。上代日本語(奈良時代の日本語)か平安時代の京都方言から派生した日本語の方言の一つとみなす考えが有力だ

だが、ペラールさんは、8世紀以前に日本語と共通の祖語から分岐した姉妹関係の別言語とする考

身のフィールドワークの結果を紹介した。例えば、「頭」は奄美の加計呂麻島・諸鈍では「カマチ」、宮古の大神島では「カナマイウ」、与那国では「ミンプル」と、全く異なっている。

日本語と琉球諸語の話者の間でも、琉球諸語の各言語の話者の間でも互いに理解ができない。ヨ

ぼ残っている。琉球諸語の母音の分析から、上代日本語ですでに失われた母音の存在がうかがわれ、日本語、琉球諸語の祖語には6母音があったことがわかるという。

一方、上代日本語には、「クシロ」(剣)、「サ」(矢)のように、琉球諸語にはなく、朝鮮語と似ている語がある。これは

朝鮮語からの借用語の可能性があり、琉球諸語のデータは日本語と朝鮮語の関係を知る手がかりにもなる。

このように琉球諸語は日本列島の言語の歴史を探るうえで鍵となる情報を含んでいるが、日本を単一民族国家とする意識が形成されて以来、方言とみなされ、聞き取りや

文法書の記述などの研究が十分に行われないままだった。今、ほとんどの琉球諸語は高齢者しか話すことができず、絶滅の危機にある。ペラールさんは、琉球諸語やあまり知られていない日本語の方言を可能なうちに調査し、記述しなければなら

ないと訴えた。

少数者の言語を言語としてきちんと扱うこと。海外からの視点ならでは重要な提言だった。

【佐々木素造】